

今、小倉小学校で人気の本です。
 貸し本になると、すぐホロホロになる
 ので「禁帯出」です。 南陵北文庫
 金川明子



「よみよみ
 よみよみ
 にたもの
 ランド」

- ・ジョン・スタイナー 作
- ・まえざわ あきえ 訳

すべて日用品で作られた絵です。
 何かかくされているかみつけてください。

恐竜時代から
 江戸時代まで
 「時の迷路」



・作・絵 香川元太郎
 恐竜時代から江戸時代まで 謎と
 とき、かくされた絵をみつけ、いろいろな時
 代を旅してみよう。



「よするに
 医学えほん」
 からたアライフ
 <おなか編>

- ・きむらゆういち 川田香文=作
- ・中地 智一 絵
- ・佐藤孝広 監修 (昭和大学医学部助教授)

口から入った食物が消化、吸収、排
 泄される様子がわかります。

ヘアピンジャー、ヒロリン娘など「から
 たアライフ」のキャラクターたちが仕事の
 役割を説明してくれます。

「世界を
 旅する
 大迷路」



- ・アンナ・ニヴェン 作・絵
- ・葦本文枝 訳
- ・PHP

世界一周レースに出発。気をつけて
 旅してください。レースにかかった
 時間を計ってみよう。

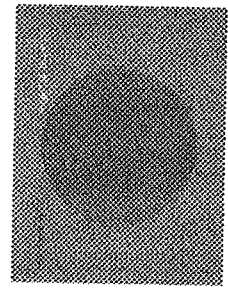
石井 桃子さん

石井桃子さんは今年4月2日、101歳で亡くなりました。

文庫で石井さんの本を並べようと思いましたが、あつち、こどもと次々に出てきました。日本の児童文学の歴史を作ってくれたのだと改めて感じました。ピエトラピエトヤくまのプーさん、うまごやんなどよく知られた翻訳だけでなく多くの創作があります。大人向きに書かれたものも含めるとおよそ200冊にもなるそうです。数ある創作の中から4冊御紹介します。(其枝なほし文庫 太田 一子)

うまごやん
雲に乗る

1947
福音館書店



戦前に書かれ昭和22年に出版されたことに驚く。出版を考えると、純粋に自分と数人の友人のために「書かれたらうた...」木に登ったうまごやんは池に映ったお空の雲に乗ろうとして、落ちてしまう。氣を失っている間に雲の仙人に家族のことも語って聞かせる。落ちて着いた、上質な家庭の雰囲気や伝わってくる。

ありこのものありこがお使いを頼まれるから、途中でかまきりに食べられてしまう。かまきりはむくとりにつべられ、むくとりはやまねこに、と昔話のように話が展開する。中川宗弥の絵が簡潔にお話とあわせている。

ありこの
おつかい

1968
福音館書店



インド、パキスタンの昔話と再話したもの。踊るたびにひすめから金の砂が飛び出す金色のしかは、金の大好きな王様に追われるがホセンに助けられる。ホセンのために王様のとろに自ら出向いたしかは、しまりには王様の姿も隠れるほど金で積もるまで、踊りやめなかつた。和田野不矩の絵。

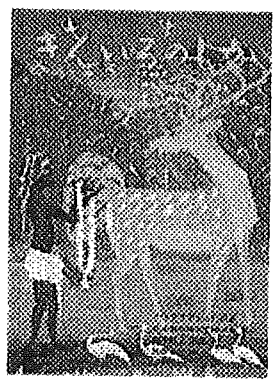


やまの
こどもたち

1956
岩波書店

やまにのこどもたちの春夏秋冬がえがかれている。お盆の下駄を売りに来たリ、年越し用のさかなを売りにきたリ、ひつごうまであったこどものたろう...

うまごやのとなりにしりかぎっており、箱膳で食卓をしいる絵を見ると今のうまい子は外国の家か、昔話の世界と思うのではないだろうか。深沢紅子の絵。



きんいろの
しか

1968
福音館書店

雨

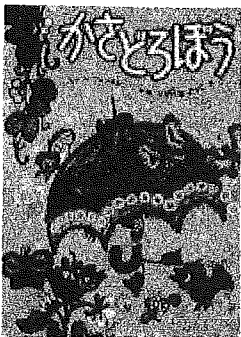
このおたよりに読まれている時、戸外からしとしと雨音が聞こえているのではないだろうか。うとうとし梅雨の季節ですね。梅雨と一口に言いますが、木々の青葉をさらに濃く染めるように降る“青梅雨”、集中豪雨になるほどの“荒梅雨”、しとしと降り続く“母梅雨”など、梅雨にもさまざまな呼び名があります。いろんな「雨」をイメージしながら、本を集めてみました。

(風の子文庫 土屋健子)



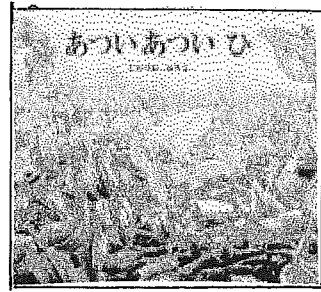
『あめがふるとき
ちやうちよほどこへ』
・M.セアリック文
・L.ワイスガート絵
・金の星社
・1974

雨が降っている時、虫葉々がどうしているかなんて、考えたことありますか？ この本は科学の本というより詩の本ですか。亀は？ 蛇は？ 虫は？ と問いかけられ、自然を見る目を研ぎ澄まされていくようです。声に出して読むと、しとしとと降り続く雨とも仲良くなれる気がします。



『かさどうぼう』
・シズカタカハシ作・絵
・徳間書店
・2007(復刊)

“雨”といえば“傘”。でも、このお話の主人公キリママおじさんは傘を見たことがありません。町に出かけたおじさんは、みんなが日よけにしている傘を見て、自分もほしいと買って帰ります。ところが、村の入口のお店でコーヒーを飲んでいる間に傘がなくなってしまうのです。おじさんの傘を盗った意外な犯人とは？



『あつひあつひ』
・しのぶかゆみこ
・佼成出版社
・2002

夏の雨といえば夕立。突然降り始めて、ふいっとあがるまでをダイナミックに描いた絵本です。地面に飛び散る雨の滴、雨に打たれる植物や虫たちが画面いっぱい描かれ、ほこりや蒸気がページの間から立ち上ってくるような気がします。言葉は最小限。絵の力を楽しんでください。



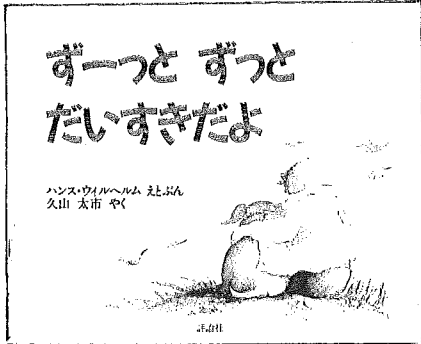
『しずくの首飾り』
・ジョン・エフィン作
・猶能葉子訳
・岩波書店
・1975

ローラはクラスの人気者。何故って、ローラがパンと手玉をたくと雨がピタリと止んで外で遊ぶことができたからです。ローラの不思議な力は北風がくれた首飾りのおかげでした。ところが、決してはずしてはいけないといわれた首飾りが盗まれてしまいます……。表題作の他、お洒落でいねりの利いた短編7編が4収録されています。

私の好きな絵本

九条子ども文庫 杉本ひと美

☆まず、私のだーい好きな一冊から
「ずーっとずっとだいすきだよ」



父のEWフイとぼくはいつもに大きくなった。EWフイとぼくは毎日おもいっきり遊んだ。ある朝、ぼくが目をさますと、EWフイは死んでいた。家族のみんなは悲しみに打ちひしがっていた。けれどぼくには救いがあった。それは... 毎日寝る前にEWフイの目を見てしっかりと「EWフイ、ずっとずきだよ」といってやっていたから。それによりもろろなぼくの思いをEWフイがしっかりと受けとめてくれていたから。

「ずーっとずっとだいすきだよ」と、相手を思う気持ちと素直に言葉に出して、ちゃんと伝えることの大切さを教えてくれる本です。言葉は伝えるためにあるんだ...とつくづくと思います。

☆小学校で読み聞かせをした時に人気のあった一冊 「となりのせきのますだくん」

となりのせきのますだくんは、ちよつと気の弱いみほちゃんと毎日いじめてばかり。ある日ますだくんがみほちゃんのお気に入りえんぴつを折ってしまったのだから、みほちゃんはけしこむをますだくんの顔に投げつけてしまう。次日、ますだくんはふたしほのが怖くて学校に行きしぶるみほちゃん...。さて、みほちゃんが学校へ行くと、ますだくんは...。すごい結末が待っています。

小学校で読み聞かせをした時に最後のページのところで女の子が「あ...怪獣のますだくんが人間に変身してる!」って叫びました。ますだくん、一歩みほちゃんに近づいたね!... リップの時代でも男の子は怒り持ちの表現がいつも少らんほう。でもそんなところがまたかわいい!



☆私の絵のお気に入りの一冊「すてきな三にんぐみ」

夜な夜な現れるくまさんとくろぼうしのこわーいとびぼうさんの三にんぐみ。ある晩、いつものように襲った馬車には女の子ひとり。親戚のお家に行くよりもおじさんたちとくろぼうがおもしろそうというティファニーちゃん。馬車から連れ出さずきのそと大事に抱きかかえるくろぼうさんの顔がとてやさしい。どうするつもりもないのにおすみを重ねてきたが、宝の山を見つけたティファニーちゃんの「これ、どうするの?」の一言で、方向性を決めた。改心したのだ。捨て子や孤児を集めて、その子と暮らすためにお城まで作った。

かわいいたィファニーちゃんの一言が、こわーいとびぼうさん三にんぐみをすてきな三にんぐみに変えてしまうという、なんとも予想外の展開がおもしろいすてきなお話。



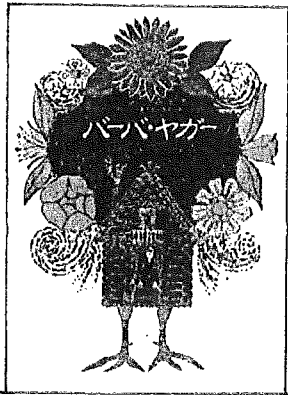
10月はハロウィーンの月です。日本ではあまり馴染みのなかったこの行事も最近はずっかり定着。ホームセンターの店先にはカボチャなどのブスが並んで気分を盛り上げてくれます。というわけで今回は、ハロウィーンと楽しむ本を紹介しします。(風の子文庫 土屋 佳英子)



『えほん 魔女のひみつ』 コリン・ホーキンス作 金の星社 1995
 ハロウィーンの主役は魔せです。もしも、「魔女ってなあに？」と聞かれてぐんとつまったら、この絵本を開きましょう。魔女のファッション、魔女の朝ごはん、魔女のお楽しみ、なんでも分かりやすいことではありません。魔女がほうきに乗って空を飛ぶのはご存知ですね。でも、ほうきは乗り心地が悪いので、最近ではバスか車が多いのだそうです。

『ゆかいな仮装をしたのしむ本』 アンジェラ・ワックス / メテオファクトリー 1997

ハロウィーンのお楽しみは仮装。その仮装のアイデアと作り方の本です。衣装から小物まで、あらゆるアイテムが揃っています。もう一度子ともやり直したいと思うのは、こんな本に出会った時ですね。「恐ろしい幽霊」「星の魔女」「びっくり手品師」あなただかになってみたいのはどれ？とにわく楽しい。ぜひ一度ご覧あれ。

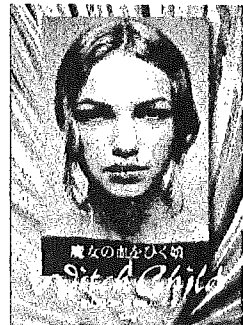


『バーバ・ヤガー』 エルネスト・スモウWilson / フラ・レトエ 童話館 1998

昔話の魔女の中で、私のお気に入りはこのバーバ・ヤガー。なにしろ、ニフトリの足がまえた小屋に住み、のび放題の髪のももゆさゆさ揺すり、鉄の歯をガガガ鳴らしているというのですから、でも、こんな恐ろしいがバーバ・ヤガーも、スープにして食べようと思ったマールシャにやりこめられ、すっかり困り果てしまうのです。

『魔女の血をひく娘』 セリア・リス 亀井よし子訳 / 理論社 2002

私たちに、って魔女は冗談ですが、かつて本気で魔女が信じられていた時代がありました。この物語の主人公メアリーは私生児で、育ててくれたおばあさんが魔女として処刑され、清教徒の群羊に粉砕してアメリカに渡ります。しかし、押さえようとしても押さえきれないメアリー自身の個性の輝きによって、いつしか魔女狩りの嵐の渦に巻き込まれてしまうのです。ストーリーの面白さは抜群、中学生以上におすすめです。



落ちてると拾わずにはいられないドングリ。秋の人気者の秘密が解き明かされる本がたくさん出ている。、その中から4冊、『本から自然へ 自然から本へ』（京都科学読み物研究会編 連合出版 2008）の文章を転載して紹介する。『本から自然へ 自然から本へ』のドングリの項にはこれらのほかに17冊取り上げられている。ざっと1つのテーマの本について知りたいときに役立ち、またそれぞれの本を実際にも読んでみたくさせる、これ自身がお薦め本である。

林のどんぐり 新日本動物植物えほん15

広井敏男文 伏原納知子絵
新日本出版社 1982



コナラの一生を扱った本。小さい子どもが手に取りやすい大きさだ。写実的で柔らかな色調の絵と文章がよく合っている。1本のコナラからおよそ3万5千粒(バケツ5杯分)のドングリがとれること。千個のドングリから72本の芽生えがあるなど具体的な数字を挙げて説明。ドングリの種類については、その形や実のつきかたから見分けられるように平易に書いてある。

山のごちそう どんぐりの木 絵本<気になる日本の木>シリーズ

ゆのきようこ文 川上和生絵
理論社 2005

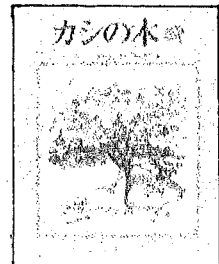
冬から始まるコナラの木の1年が温かみのあるやさしい絵と語り口で紹介されている。虫や動物などの生き物との関わり、人とドングリとの関わりがわかる。



カシの木 ゴードン・モリソン作

越智典子訳
ほるぷ出版 2006(原著 2000)

カシの木の1年が、木を訪れる鳥、虫、動物たちとともに美しい絵で描かれている。生き物や言葉の解説がモノクロの絵を添えてページの下の方に載っている。アメリカ東部のホワイトオークが主人公で、でてくる生き物もその地域のものだが、日本にもよく似た植物があり、よく似た動物がいる。



ドングリ観察事典 自然の観察事典16

小田英智構成・文 久保秀一写真
偕成社 1998

コナラを中心とした観察事典。ドングリの木と虫や動物たちとの関わりが詳しく書かれている。とにかく写真がいい。クローズアップされた写真、連続写真など、見出しと写真のみをみただけでも伝えたいことがわかる。本文もわかりやすい。ドングリのなかまの紹介のページで、ドングリは写真になっていて説明もわかりやすいのに、葉がシルエットだけでわかりにくいのが残念。

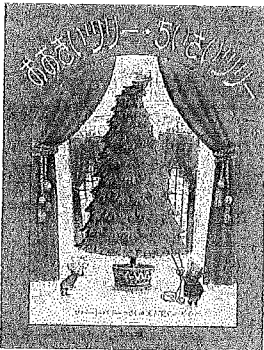
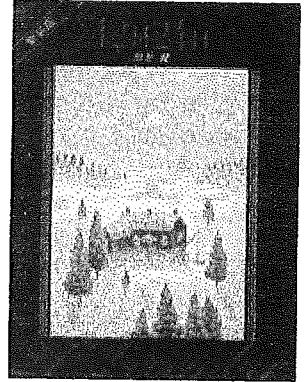


12月に入ると、あちらこちらでピカピカと色とりどりの明かりが付き、サンタが壁をよじ登ったり、煙突を覗き込んだり、ジングルベルの音色さえ聞こえてきます。子どもにとって待ち遠しいクリスマス、サンタさんは何を持ってきてくれるのでしょうか。そんなことを想像しながらクリスマスの本を選んでみました。

『12月24日』 黒井健 (白泉社) 1997.10

北の国に住むサンタのおじいさん、クリスマスの前の日は何をしているのかなあ。朝起きて、食事の支度をし、ゆっくりと朝ごはん。トナカイたちにも朝ごはん。あたり一面雪に覆われています。ゆったりと一日を過ごしたおじいさんは、日が暮れるとサンタの服に着替えて、さあ、みんなのところへ出発です。

ほんわか~とした、あたたかい絵がとても素敵です。



『おおきいツリー ちいさいツリー』

ロバート バリー / 光吉 夏弥 (大日本図書) 2000.10

お屋敷に届けられた大きなクリスマスツリー、天井につかえてしまいます。先をちょっと切ってみました。切ったツリーの先は小間使いのアレードさんのお部屋に。でもやっぱり先が少しかえす。ここでも先がちよっと切られ、そして、次々と切られて、どんどん小さくなっていきます。最後には誰のおうちに行くのでしょうか？

絵がとても楽しくてユーモアがあり、ほほえましい絵本です。

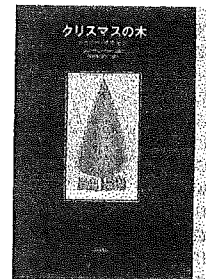
『クリスマスの木』

ジュリー サラモン/ジル ウェーバー(画)/中野 恵津子(新潮社)1996.11

この本は日ごろ忙しい大人の人に読んでいただきたい。毎年、ロックフェラー・センターでは立派なクリスマスツリーが飾られます。今年もセンターの造園担当者はツリーにする木を探し回りますが、彼が見つけた素晴らしい木は、修道院のシスター・アンソニーの大切な木でした。

その木がどうして世界のロックフェラー・センターのクリスマスツリーになったのでしょうか。そして、この立派な大きな木がどのようにして運ばれたのでしょうか。シスター・アンソニーと造園担当者の木に対する思いが心を温めてくれます。

多忙なひと時、クリスマスプレゼントを貰った気持ちになると思います。



(池村奈津子)

暖冬の予報と温暖化の脅威に、ことのほか雪の恋しい冬です。お正月もすんでほっと息、暖かいこたつの中で、雪のお話はいかがでしょうか。
 (風の子文庫 土屋佳英子)

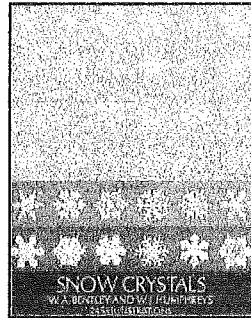
『雪の写真家 バントレー』

バントレーは、雪に魅せられ生涯をかけて雪の結晶の写真と撮り続けた人です。研究者ではなく一介の農夫だ、ということですが、木版画の絵がその質朴な生きざまにマッチして、こんな生き方もあるのだと思いを深くします。4コマの雪の舞う日に開きたい絵本です。



- ・ジャクソン・ブルグス・マーティン 作
- ・メアリー・アゼリン 絵
- ・千葉茂樹 訳
- ・BL出版
- ・1999年

『SNOW CRYSTALS』



バントレーの晩年になって撮りためた雪の結晶の写真集が出版されました。この写真集は今お手に入ります。

彼が生きたのはおよそ百年前。写真は薬劑と塗った乾板で一枚一枚撮りました。再精込めた写真がすらと並んでいます。1ページに12枚、およそ200ページ。静かな迫力が伝わってきます。

『雪は天からの手紙』

池内了編 岩波少年文庫 2002年
 世界で初めて人工的に雪の結晶を作るのに成功した中谷宇吉郎さんのエッセ集です。中谷さんが雪の研究を始めたのはバントレーの写真集を見たのがきっかけでした。そして、同じハーバード大学出版部から研究書も出版することになります。巡り合わせて不思議ですね。「湯川秀樹さんのこと」など、興味深いエピソードも。



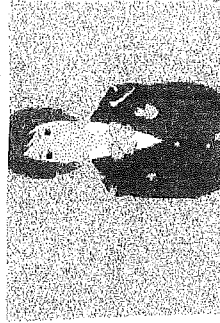
『きつねのスケート』

- ・ゆもとかすみ 文
- ・ほりかわまこ 絵
- ・徳間書店
- ・1998年



小学校低学年向けの読み物を1冊。主人公のキツネは遠くからこの森にやってきました。疲れ切ってバツリ倒れたところをみんなに介抱してもらったのに、なおた途端にいたすらのし放題。ノースミなんかシソにしてやるなんていうんです。そのノースミとキツネの友情がほのぼのとしたいいお話です。とってもかわいい挿絵もついています。エッセいかに雪が出てくるのかですって？これは、読んでのお楽しみ。

そろそろ、「卒業式」のシーズン。幼い人には別れよりも、小学校入学への期待でいっぱい、「卒業」の本がないのは当然でしょうが、それ以後のものでも案外少ないのです。学校を背景に卒業までの子どもたちを描いた本を選んでみました。（読書会つぼろ 高田エカ子）



『リボン』

- ・草野 たき 作
- ・ポプラ社
- ・2007年



ちえちゃんの卒業式

絵本
『ちえちゃんの卒業式』

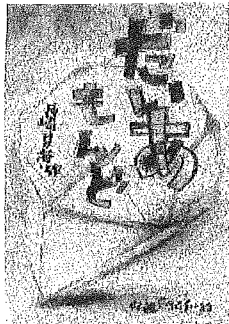
- ・写真・文
星川ひづり
- ・小学館
- ・2000年

未熟児で生まれ、手と足に障害のあるちえちゃん。おかあさんの付き添いで小学校に通い、卒業式を迎えた。6年生になってからのクラスのみんなとの気持ちのすれ違いやみんなからのきびしくもあったかい励ましなどの大切な思い出... 強く踏み出してゆくちえちゃんの日々を記録した写真絵本。

卒業式に憧れの先輩の胸のリボンと後輩かもうという伝統がある中学の卓球部には卓球がうまくなることより、彼氏を見つけるのに有利という理由で入部してくる生徒が多い。亜樹は本気で卓球に取り組んでいるのに3年になっても勝てず、クラブスと組んでいた美佳にも見捨てられた。高校生のお母市ちゃんはおかあさんと進路のことでけんか。「すべてに波風を立てない」ようにしてきた亜樹は自分を見つめ、変わっていく。卒業までの15歳のゆるる内面をリアルにさややかに描く。

『だいまもんど』

- ・長崎 夏海 作
- ・佐藤 真紀子 絵
- ・新日本出版
- ・1999年



6年生のサラは女の子のグループからは外れ、仲良しの男の子、カイトやと、きんと遊ぶ。シカも家族のトラブルもあるけれど、前向きで行動的。いつかひとりて本と読む佐伯さんやいじめをやっていた美穂など、クラスメイトの意外な面も見、触れ合えるように...

さて、卒業アルバムのグループ写真、サラの仲間たちの笑顔は、ほんと、でも元気になる本。

『卒業の夏』

- ・K.M.ノスト 作
- ・福武文庫
- ・1990年



ピアノとサッカーの才能は抜き出たものを持ちながら、まるで自分を破壊するかのようには秩序や規則など無視して大人社会に反抗し、暴力をくりかえす17歳のペンは英国の労働者階級の少年。そのあらゆるさの中に欺瞞やずるさと拒否する青春の純粹さがのび、せつない。古い作品だが、やはり圧倒的な力のあるヤングアダルトの傑作。

ひと月もすれば訪れる桜の季節を前に、山科疎水の水は止められ、1年に1回の補修を受けています。桜の花を映し、受け止める水面の準備にもなっています。

先月この欄では「学校を背景に卒業までの子どもたちを描いた本」が紹介されました。今回も卒業の季節に読むと、より深く心にしみる(気がする)絵本を選んでみました。(太田一子)

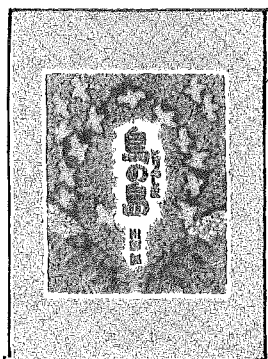
『からすたろう』 やしまたろう文・絵 偕成社 1979

山奥から村の学校に通うちびは、友だちはなく、ひとりぼっちの毎日だったが、じっと観察し、耳を澄まして楽しむことを身に着ける。6年生になって担任になったいそべ先生はちびを無視せず、他の生徒と同じように扱う。そして学芸会でちびにしかできない鳥のナキゴエをさせる。鳥のナキゴエを演じわけ、住んでいる山の様子までも伝えられるちびを見ていわれのない偏見を抱いていたことに皆はきづく。



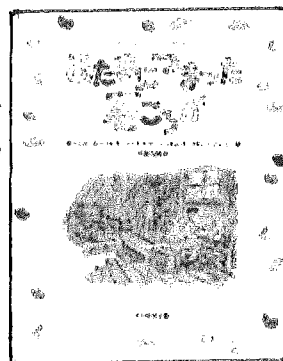
『鳥の島』 川端 誠 BL出版 1997 新装版

大空へのあこがれを抑え切れなくなった鳥たちは飛びたちそして海に落ちていく。何千年もの間それが繰り返されたが、ある日やはり力尽き果て、海に落ちる寸前の鳥が島に救われる。その島は、これまで望みなはず海に沈んでいった鳥たちが積み重なってできた島だった。鳥が再び力を得て飛び立ったとき、つもり積もった鳥たちも寄せる大波に吹き上げられていった。



『あたまにつまった石ころが』 キャロル・オーティス・ハースト文
ジェイムス・スティーブンソン絵 千葉茂樹訳
光村教育図書 2002

作者の父はあたまに石がつまっているといわれるほど石が好きで、日々の生活を大事にしながら石を愛し、最後には独学でスプリングフィールド科学博物館の館長になる。父は石はもちろんだが、「学ぶ」ということそのものを愛し、尊敬していた。
スケッチ風の挿絵が楽しい。



『ひらがなにつき』 若一の絵本制作実行委員会文
長野ヒデ子絵 エルくらぶ 2008

60歳を過ぎてから識字学級に通い文字を習う吉田一子さんの日記を基に作られている。字をかけないことのひけめ、くやしさを、字を書けたときの喜び、が絵と文字によって読者にひしひしと伝えられる。さらりと書かれた吉田さんの人生にはとするとところも多い。

